

# 学者と名誉

夏目漱石

青空文庫



木村項きむらこうの発見者木村博士きむらの名は驚くべき速力じゆんじつを以て旬日

を出ないうちに日本全国に広がった。博士の功績ひようしやうを表彰ひょうじやうした  
がくしかいじん 学士会院とその表彰をあくまで緊張して報道する事を忘れな

った都下の各新聞は、久しぶりにといわんよりはむしろ初めて、

純粹の科学者に対して、政客、軍人、及び実業家に譲らぬ注意を  
 一般社会から要求した。学問のためにも賀すべき事で、博士のた  
 めにも喜ばしき事ちがひに違ちがない。

けれども今より一カ月前に、この木村博士が何処に何をしてい  
 るかを知っていたものは、全国を通じて僅か百人を出ぬ位であつ  
 たろう。博士が忽然こつぜんと著名になったのは、今までまるで人の眼

に触れないで経過した科学界という暗黒な人世じんせいの象面しょうめんに、  
一点急に輝やく場所が出来たと同じ事である。其所そこが明るくなつたのは仕合せである。しかし其所だけが明るくなつたのは不都合である。

一般の社会はつい二、三週間前まで博士の存在について全く神經を使わなかった。一般の社会は今日といえども科学という世界の存在については殆んど不関ふかん心しんに打ち過ぎつつある。彼らから見て闇やみに等しい科学界が、一樣の程度で彼らの眼に暗く映る間は、彼らが根柢こんていある人生の活力の或物に対して公平に無感覺であつたと非難されるだけで済むが、いやしくもこの暗い中の一点が木村項の名で輝やき渡る以上、また他が依然として暗がりに静まり

返る以上、彼らが今まで所有していた公平の無感覚は、俄然とし  
て不公平な感覚と変<sup>へん</sup>性<sup>せい</sup>しなければならない。これまではただ無  
知で済んでいたのである。それが急に不徳義に転換するのである。  
問題は単<sup>ひとえ</sup>に智愚<sup>さかい</sup>を界する理性一遍の牆<sup>かき</sup>を乗り越えて、道義の圈<sup>けん</sup>  
内に落ち込んで来るのである。

木村項だけが炳<sup>へい</sup>として俗人の眸<sup>ひとみ</sup>を焼くに至った変化につれて、  
木村項の周囲にある暗黒面は依然として、木村項の知られざる前  
と同じように人からその存在を忘れられるならば、日本の科学は  
木村博士一人の科学で、他の物理学者、数学者、化学者、乃至動<sup>ないし</sup>  
植物学者に至っては、単位をすら充たす事の出来ない出来損<sup>できそこ</sup>ない  
でなければならない。貧弱なる日本ではあるが、余<sup>よ</sup>にはこれほど

までに愚図ぐずが揃そろつて科学を研究しているとは思えない。その方面の知識に疎うとい寡聞かぶんなる余の頭にさえ、この断見だんけんを否定すべき材料は充分あると思う。

社会は今まで科学界をただ漫然と暗く眺めていた。そうしてその科学界を組織する学者の研究と発見とに対しては、その比較的価値所どころか、全く自家の着衣ちやくいき喫飯きつぱんと交渉のない、徒事いたずらごとの如く見倣みなして来た。そうして学士会院の表彰に驚ろいて、急に木村氏をえらく吹聴ふいちようし始めた。吹聴の程度が木村氏の偉さと比例するとしても、木村氏と他の学者とを合せて、一樣に坑中こうちゆうに葬り去つた一カ月前の無知なる公平は、全然破れてしまった訳になる。一旦いったん木村博士を賞揚しょうようするならば、木村博士の功績に

応じて、他の学者もまた適當の名誉を荷<sup>にな</sup>うのが正当であるのに、他の学者は木村博士の表彰前と同じ暗黒な平面に取り残されて、ただ一の木村博士のみが、今日まで学者間に維持せられた比較的地位を飛び離れて、衆目の前に独り偉大に見えるようになったのは少なくとも道義的不公平を敢てして、一般の社会に妙な誤解を与うる好意的な悪結果である。

社会はただ新聞紙の記事を信じている。新聞紙はただ学士会院の所置<sup>しよち</sup>を信じている。学士会院は固<sup>もと</sup>より己<sup>おの</sup>れを信じているのだらう。余といえども木村項の名誉ある発見たるを疑うものではない。けれども学士会院がその発見者に比較的位置を与える工夫<sup>くふう</sup>を講じないで、徒<sup>いたず</sup>らに表彰の儀式を祭典の如く見せしむるため被賞者

に絶対の優越権を与えるかの如き挙に出でたのは、思慮の周しゆうみ密つと弁別べんべつの細緻さいちを標ひようぼう榜ぼうする学者の所置としては、余の提てい供きにかかる不公平の非難を甘んじて受ける資格があると思う。

学士会院が榮譽ある多数の学者中より今年はず木村氏だけを選んで、他は年々順次に表彰するという意を当初から持っているのだと弁解するならば、木村氏を表彰すると同時に、その主意が一般に知れ渡るように取り計はからうのが学者の用意というものである。木村氏が五百円の賞金と直径三寸大の賞しょうはい牌はいに相当するのに、他の学者はただの一銭の賞金にも直径一分の賞牌にも値せぬように俗衆に思わせるのは、木村氏の功績を表すがために、他の学者に屈辱を与えたと同じ事に帰着する。



——明治四四、七、一四『東京朝日新聞』——



# 青空文庫情報

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

入力：柴田卓治

校正：しず

1999年8月13日公開

2003年10月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 学者と名誉

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>